



問い合わせ先：
シャウナ・シウダ
広報部長
+1-630-468-7075

Shauna.Schuda@LionsClubs.org

即時リリース用

ブラジルの学生アドリエネ・ミレリー・ダ・シルバさんが **2025～2026** 年度ライオンズ・インターナショナル平和作文コンテスト大賞を受賞

(イリノイ州オークブルック) - 視覚障害のある青少年向けに開催された 2025～2026 年度ライオンズ国際平和作文コンテストで、ブラジル、パルマレス出身の 13 歳の生徒アドリエネ・ミレリー・ダ・シルバさんが大賞を受賞しました。

ライオンズ国際平和作文コンテストは、11 歳から 13 歳の視覚障害のある若者が、作文を通じて平和に対する自分たちの視点を共有することを奨励しています。今年のテーマ「ひとつになって」は、世界中の何千人もの学生たちに、団結、共感、そして人とのつながりについて考えるきっかけを与えました。

ダ・シルバさんの作文は、平和は思いやりと理解から始まるという力強いメッセージにより、国際大賞に選ばれました。弱視と共に生きる彼女は、自分の経験から、真の結束は外見を超えて見ることから生まれるという信念を持つようになった経緯について書きました。

「私が伝えたいメッセージは、外見を超えて人を見ることを学んだときに、平和は私たち一人ひとりの内側から始まるということです」と、サンタ・ルイザ市立学校の 7 年生であるダ・シルバさんは語ります。「視力が低くても、最も大切なのは目で見るのではなく、心で感じることだということを学びました」。

ライオンズクラブ国際協会の A.P.シン会長は、ダ・シルバさんの功績を祝い、彼女の作文の力強いメッセージを称賛しました。

「アドリエネさんの言葉は、平和は共感と理解から始まることを私たちに思い起こさせてくれます」とシン会長は述べます。「平和作文コンテストなどのプログラムを通じて、ライオンズは世界中の若者が思いやりと敬意によっていかに私たちの周りの世界を変革し、すべての人にとってより平和な未来を創造できるかについて考える力を与えています。」

ダ・シルバさんは、自分の体験談によって視覚障害を持つ他の若者たちが自分自身を信じて夢を追い求めるよう励まされるきっかけになることを願っていると述べました。執

筆に加えて、ダ・シルバさんは読書、旅行、教会の聖歌隊での歌唱を楽しんでおり、いつか小児科医または獣医師になることを志しています。

ライオンズ国際平和作文コンテストは、11歳から13歳の視覚障害のある学生を対象としており、参加者が作文を通じて平和というテーマを探求することを呼びかけています。

2025～2026年度の大賞受賞者として、ダ・シルバさんは以下を受け取ります。

- 5,000ドルの賞金
- 名前が刻まれたアワード
- 特別表彰式への旅行（家族2名同伴）

ライオンズ国際平和作文コンテストについて

ライオンズ国際平和作文コンテストは、11歳から13歳の視覚障害のある学生を対象とした国際的な青少年作文コンテストです。このプログラムは、若者が創造的な文章表現を通じて自らの考えを表現することを奨励し、平和、インクルージョン、そして国際理解を促進します。

世界中のライオンズクラブが平和作文コンテストを地域で主催し、入賞作品を地区、複合地区、国際レベルの審査を通じて進めています。

ライオンズ・インターナショナルについて

ライオンズ・インターナショナルはライオンズクラブ国際協会およびライオンズクラブ国際財団から構成されています。ライオンズは5万のクラブに所属する140万人の会員による奉仕と財団の交付金による支援を通じて、地域社会と世界が直面する最も大きな課題の数々に取り組んでいます。私たちは地域社会で、そして世界で、健康と福祉を向上させ、コミュニティを強化し、援助を必要としている人たちに支援を提供しています。ライオンズ・インターナショナルは、ニーズのある世界に奉仕しています。

詳細は lionsclubs.org/ja/ をご覧ください。

2025～2026年度ライオンズ国際平和作文コンテスト大賞受賞者

アドリエネ・ミレリー・ダ・シルバ、13歳

「ひとつとなって：外見を超えた真実」

ほとんどの人は光と色を通して世界を知ります。人々は国境、肌の色の違い、そして「私たち」と「他者」を分ける境界線を見えています。私も光を見ますが、それは私に優しく届きます。フィルターや分類を作り出すような鋭さはありません。私は弱視で生まれ、それによって平和は見た目から始まるのではなく、自ら盲目的に判断することから始まるということを知りました。

「ひとつとなって」というテーマは、私たちに内省を求めています。世界の不調和、戦争、排除は偶然ではありません。それらは視覚的要素の計算ミスの結果です。社会は、大きいもの、背の高いもの、美しいもの、または鏡に映るものをそのまま価値あるものとして教えられています。そして、このイメージに合わないものはすべて、非常にしばしば拒絶され、恐れられ、または沈黙させられるのです。私にとって、人々はもっと親密なものによって明かされるものです。それは歩道での足音の振動であり、質問をする前の息遣いの変化であり、人々が共有する静寂の質なのです。あなたの肌の色ははっきり見えませんが、あなたが弱い立場の人にとってどう接するかや、言葉をどう使うかによって明らかになる魂の色ははっきり分かります。私の経験では、人々を真に隔てるものは、心と心との間の距離だけです。

この宇宙では、私たちは皆同じ宇宙の物質でできています。私の手を構成する原子は、山を形成する原子と同じであり、地球の反対側に住む誰かの心臓に存在する原子と同じです。私たちは本質的に同じ存在ですが、異なる装いをまとっています。装い、すなわち目に見える表面的なものにしがみつくと、私たちは結束を破ってしまいます。

「ひとつとな」ることは、すべてにおいて同意しなければならない、または私たちのアイデンティティを消し去らなければならないという意味ではありません。反対に、真の結束とは、相手をありのままに受け入れることです。つまり、あなたの違いが私の不完全な世界観を補完してくれるので、私はあなたの違いを大切するということです。それは、あなたの喜びが、ある意味で私の喜びでもあり、あなたの痛みは私の安心の基盤に亀裂をもたらすということです。もし私たちが一瞬、みんなで目を閉じることができたなら、誰がより多く持ち、誰がより少なく持っているか、誰が強く、誰が弱いか、誰がここの出身で、誰があそこの出身かは見えなんでしょう。私たちは、生きること、愛すること、そして私たちの唯一の故郷を守ることへの共通の切迫感だけを感じるでしょう。

私たちは、知覚するのに光を必要としない見えない糸を感じるでしょう。

平和は遠い目的地ではなく、私たちの結束の現れです。それは、人類がついに外見を超えた真実を認識する瞬間です。すなわち、私たちは、目に見える部分の総和以上の存在であるということです。私たちはかけがえのない一つの存在であり、暗闇の中で共に脈

動し、光を切望しながらも、すでに最も深い本質によって結ばれています。そして、これが私が目を使わずとも見ることを学んだ真実なのです。